

下北の春

連休前半の3日間、下北半島を中心に旅してきたのでご報告する。

4月28日（土）

大宮 11:54 発の新幹線「はやて 77号」で、八戸へ着いたのが 14:39。車窓の景色は快晴で、福島・宮城の桜は満開、岩手・青森は3分咲きといったところであった。郡山の付近にはいまだにブルーシートをかぶせた家があって、震災の後片付けがすすんでいないようだ。八戸駅前レンタカーを借り、カーナビに久慈市と入れた。ガイドされる通りに走って行ったら、海岸ではなくて山中を横切る直線道路を走ることになった。早春のまだ枯れ枝のままの林の中に、ところどころ畑がある。トンネルの入り口の垂直の崖は断層の線がくっきりと切れ込んでいる。三陸の山は数十年ごとに繰り返す地震のたびに盛り上がりできあがったのであろう。

およそ1時間余り 50km を走って、久慈の町へ入り、中心街にある「くじ やませ土風館」という道の駅で休んだ。気温は 11℃で肌寒いが日差しは強く暖かい。町は比較的標高が高いらしく、津波の被害は多くはなかったようだ。

帰りは、海岸沿いに走る国道に沿って八戸へ向かった。国道は鉄道より内陸側の小高いところを走っている。途中の種市海岸で海沿いの低地の漁村に入ってみたが、海岸線は高さ 7-8m もある分厚い防波堤にがっちり守られていた。ともかく崖がいきなり海に没しているような地形で、町は国道沿いの丘の上に中心が移っているように見えた。八戸近くになると平地が広がり、けばけばしい色の郊外型のショッピングセンターが数多くあった。

ホテルで一休みしてから、中心街の居酒屋を覗いてみたら、どこも若者たちで満員。この春甲子園で準優勝した光星学園（八戸のカトリック系の高校）の関係者らしい若者たちも大勢いた。うろうろと歩いていたら、由緒ある西洋館のレストランが目についたので入ってみた。大正モダンの八戸一の歴史的建造物として保存されている建物で、かつては江戸時代以来の造り酒屋「河内屋」の事務所として使われ、現在は「誇る屋」というレストランになっている。刺し身の中に立派なホタテがあった。

4月29日（日）

朝 8 時過ぎにホテルを出て、下北半島の東海岸を一路北に向かって走る。八戸市を出るとおいらせ町へ入る。十和田湖から流れ下って東進する奥入瀬川が太平洋にそそぐ河口の町である。右に海岸線の松林を望み、左に林と開墾した畑が交互にあらわれる一本道である。左へ行ったら三沢空港という標識を越えた畑の中の側道で一休みする。広い畑と牧草地がある。北海道と見分けがつかないような風景である。

八戸を出てから 1 時間ほど走ったところに六ヶ所村がある。鷹架沼の河口付近に「原燃輸送株式会社の専用埠頭がある。入り口のゲートが開いており、広い埠頭に自家用車が 2 台止まっていて、ふたりの子供連れの若い夫婦と、一人の男性が釣り糸を垂れている。

「何が釣れるんですか」と聞いたら「カレイです」という。「今夜のおかずが釣れるといいですね」と律子。

コンクリートで固めた立派な作業広場の奥に、並の荷役埠頭には見かけない 2 階建ての立派な事務所があり、埠頭の付け根の所に新品と言ってもよいようなガントリークレーンが 2 台あって、1 台は 150 t、もう 1 台は 25 t の標識がある。見たところ稼働率は年間数日と思われる（注 1）。原子力関連の一連の設備は、途方もない専用インフラストラクチュアがいるのだ、と実感した。

そこから鷹架沼と尾鮫沼の間の道路を内陸へ向かうと尾鮫沼の西側の丘の上に日本原燃株式会社の「六ヶ所再処理工場」がある。その工場を 1 km 以上の距離から遠望するのが「六ヶ所原燃 PR センター」である。途中の道路は立派で周辺に核燃料処理に係る研究所がたくさんあり、また、遠方から来た人たちの立派な宿舎が点在する。PR センターも豪華な建物で、内部に、遠隔操作の使用済み燃料集合体を搬送し、裁断する自動機械が置いてあった。最上階の展望室からは白亜の再処理工場と、むつ小川原国家備蓄基地のタンク群が遠望された。訪問者は、われわれのほかに乗用車が 5 台くらいで、閑散としていた。

六ヶ所村は戦後の開拓地として満州から引き揚げてきた人々が入植し、ようやく農業が地についてきたところへ核燃料処理施設の敷地として追い立てられるという歴史があり、今も外来の施設がおできのような違和感を醸している。地元の人びとと馴染んでいとは見えない異様な雰囲気である（注 2）。

そこから小一時間ほど北へ走ると白糠漁港の先、老部川の北側に東通原発がある。海岸に沿った広い林地を原発の敷地として買い占めており、展示館は 1 km ほど山の方の林に入ったところにある。現在、東北電力の東通 1 号機だけが完成しており（2005 年 12 月運転開始）（注 3）、同 2 号機と、東京電力の 1・2 号機が計画中である。駐車場には自家用車が 5 台ほど停めてあったが、館内は閑散としていた。展示模型も今まで見たどの原発のものより簡素なつくりで、原発の説明というより、地元の子供の自然学習のための図書館のようであった。そして、庭は自然林の中を散歩するように作られており、場違いな感じがした。

そこを出てから、半島を西へ横切ってむつ市近川へ出た。峠を越えるとき初めて恐山の山容を見、陸奥湾を望んだ。陸奥湾沿いの国道に面したコンビニで昼食を買ったが、その付近に核廃棄物中間貯蔵施設の計画予定地という矢印が付いた看板が出ていた。

むつ市を抜けて半島の北側へ出ると、関根浜に面する海岸に「むつ科学技術館」という展示館があり寄ってみた。行くまで知らなかったが、原子力船「むつ」を記念する展示館であった。建物そのものが原子力船「むつ」を模して造られており、中の展示物も原子炉模型や燃料集合体の模型などがあって、気合が入っている。本格的な展示館を目指してい

たことがうかがえる。圧巻は、「むつ」の制御室や操舵室の設備をそっくり移設して展示していることである。とくに制御盤は、わたしが新入社員のころのプラントの制御システムがリレーとペンプロッターで組み立てられていたころのものを彷彿とさせて懐かしかった。

そこを出てから、津軽海峡に面した海岸沿いの道路を西に向かい、本州の最北端である大間崎へ向かった。山が海岸にまで迫り、狭い平地の道路沿いに集落が点在していた。大間崎は観光スポットであり、観光バスが数台、自家用車が数十台止まっていて、かなりの賑わいであった。対岸の函館は、20kmの距離にある。

大間に興味があったのは、その岬の西側に建設中の大間原発が現在どの程度進んでいるのだろうかということであった。西側の町を通り抜け半島先端の西海岸沿いの道路をしばらく行くと建設現場があった。もちろん立ち入り禁止であったが、海岸段丘の広い範囲を占有して工事たけなわという感じであった(この日は休業)。この原発は電源開発(J-Power)が初めて建設するもので、100%MOX燃料を利用するもので、着工は2008年、工事完了は2013年末、営業運転開始予定は2014年11月であった。したがって、工事は2/3くらい完了しており、送電線もできている。果たして原子カムラの人びとは、ここで引き返す英断ができるであろうか。負け戦と分かっているにもかかわらず誰も決断ができなくてずるずると破局まで進むのではないだろうか。原発サイトを南側の集落から遠望した後、半島の北側、津軽海峡沿いの道に戻って、1時間余りで、むつ市斗南温泉のホテルへ着いた。

むつ市は人口6万人。ホテルの窓から見る夜景は美しかった。昔、江戸末期に加賀の豪商銭屋五兵衛は、千石船を日本海沿岸沿いに走らせて、下北半島や青森の商人たちと取引していた。わたしの従弟で石川県の歴史に詳しい木越隆三は『銭屋五兵衛と北前船の時代』でこう書いている(注4)。

銭五の孫余三郎の記録した古文書を読んでいたら、銭屋の年賀状の宛て先の一覧が目に入った。「年頭状遣ス箇所附」という題につづき、越後寺泊・新潟・直江津・秋田・酒田・青森、下北半島の川内・大畑・脇野沢、津軽の三厩・鱒沢・平内などの商人が書かれていた(中略)。さらに「木綿方年始状」の宛て先が、その後ろに書かれ、野辺地商人を20名あまり書き連ねていたのに驚いた。銭屋の木綿商人の主要な取引相手は、野辺地の商人たちだと一目で了解でき、野辺地と銭屋の結びつきの深さを直感した。

ここで、念のために下北半島の地名を確認すると、半島をマサカリに見立てると、野辺地は付け根の陸奥湾側。川内・脇野沢は刃の下側(陸奥湾側)、大畑は上側(津軽海峡側)で、大間崎と尻屋崎の中央あたり。陸奥湾側の豊かな地域との取引は理解しやすいが、山が海に落ち込んでいる恐山の山裾の町の人々ともはるばる交易していたというのは目を開かれる。

この晩は温泉につかり、あらゆる料理にホタテが入っている旅館のご膳をいただき、右

足にサロンパスをペタペタ貼って寝た。

4月30日（月）

朝8時にホテルを出、むつ市（マサカリのあご）から、刃の下辺の海沿いの道をゆっくり走って、南西端の脇野沢港を目指した。市街を抜けると大湊という天然の良港がある。現在は自衛隊の軍港で、海上自衛隊と航空自衛隊が駐屯している。下北半島には三沢基地や米軍天ヶ森射爆場、泊射爆場、下北弾道試験場などの軍事施設と核燃料処理施設や原発などが集中しているが、これらの施設の周辺の道路だけがやたらに滑らかに手入れされている。距離は40kmで、ホテルで聞いたら1時間の道のりだというが、フェリーの出発時刻には2時間以上ある。途中で点々と眺望を楽しむ駐車場があるので、そのたびに車を停めてその周囲や対岸の夏泊半島や八甲田山を望んだ。山が海岸までせり出して狭い海岸の平地に人々が軒を連ねているところが多いが、学校はもちろん、個人の住宅も真新しく大きいものが多い。人々は貧しいという下北への先入観は間違っているようだ。

蠣崎のあたりの海に張り出した駐車場で車を停めたとき、横浜ナンバーのピカピカの車をさらに磨いている先客がいた。「こんにちは」と声をかけると、手を止めてやってきた。「おれ、ここの出身で、横浜に40年住んでいて去年60になったもんで帰って来たのさ」「横浜じゃ、長距離バスの運転手をやっていたのさ。ついおとついか、金沢からの夜行バスが群馬県で事故を起こしたでしょう。ああいう運転手だったのさ。もう引退して、ここへ帰って家を建てて、ホタテ養殖の手伝いをしたり、畑をしたりしているのさ。この辺は山菜の宝庫だな」

「フキのトウが道端にいっぱいあったわね」と律子。

「都会の人は珍しがってフキのトウを採るんだが、ここらのもんは笑うのさ。・・・これからは、わらび・ぜんまい・たらのめ・・・」

「この辺は立派な家が多いね」とわたし。

「そうよ。おれは帰ってくると、地面はただでやるからと言われたよ。まあそうもいかないうれしいよね。しかし、年寄りだけになって住めなくなって出て行く人も多いんだ。東京では4千万円ほどする大きい家を中古で都会の人が125万円で買ったという話もあるよ。並の家だったら、中古で20万や30万くらいだ。ここを出て行く人はそんな値段でも売ってしまうんだよ」

「ホタテは3日続けて食べると飽きちゃうよ。妹が杉並にいて、そのほか兄弟合わせて5人が関東にいるから一晩走って届けてやるのさ。みんな喜ぶわな。宅急便で送ればわけないが、まあ、顔も見たいしさ」

人のよいおじさんはさらに観光案内もしてくれた。都会で接客商売をしながら働いていたというが、すれたところがこれっぽっちもない好人物であった。30分ほども話しこんでしまった。

脇野沢港へはちょうどよい時刻に着き、対岸の津軽半島の中ほど、蟹田港行きのフェリ

一に乗った。航行距離約 20 km を 1 時間で渡る。船倉には 20 台ほどの乗用車が乗り込み、乗客は 50 名ほどであった。少し肌寒かったが、甲板は気持ちよく、周囲の景色の移り変わりが面白かった。航路の中央で北を見ると、右手に下北半島の海岸線、左手に津軽半島の海岸線が見える。下北半島の山裾は 60 度ほどの角度で海面に落ち込んでいる。津軽半島の山々は富士山のように裾野がなだらかで海面に対して 15 度ほどの緩い角度で沈んでいく。当然津軽側には海沿いの平野があり、下北にはない。この違いは地下のマグマが噴出した時のマグマの粘度による違いであろう。もっとも低い玄武岩質（酸化ケイ素＝ガラス質が 45%）では $10\text{Pa}\cdot\text{s}$ 、石英安山岩（酸化ケイ素が 65% 前後）では 10 の 10 乗 $\text{Pa}\cdot\text{s}$ と大きく違う（注 5）。その化学成分の違いによって地形が変わり、山容や海岸平野の広狭が決まり、社会経済条件にまで影響が及んでいる。

蟹田へ上陸したのが昼ごろで、そこから、新青森駅の近くを通り青森市内を抜け、みちのく自動車道を通って七戸へ行った。途中、山中の道の両側は残雪が斜面を覆う林が多かった。七戸の近く、東北町の道の駅へ寄ったら、ちょうど小川原湖の内陸側の岸に近く、遠くに核燃料再処理工場の白い建物が見えた。そして、小川原湖のシジミを煮込んだ佃煮などを売っていた。さらに三沢の方へ東進し、第 2 みちのく自動車道を通って八戸北 IC で高速道路を降りた。レンタカーを返す時間までまだ 1 時間余りあるので、八戸の港を見てもようというわけで、港に向かって行った。ところが、海沿いは工業団地になっていて、製紙会社や化学会社などが大きな敷地で海岸線を占領している。それらの向上のフェンスを左に見ながら南下していくと、駅の近くを過ぎて、古い港町の狭い道路に入った。種差海岸ということまで行くと、八戸水産科学館という建物があり、丘の上から漁港が一望できた。ようやく、満足して八戸駅へ行き、16:36 発、大宮 19:22 着の列車で帰った。

注 1. 原燃輸送株式会社「六ヶ所再処理工場向け使用済み燃料の輸送量の推移」によると、平成 22 年度および 23 年度の輸送実績は、使用済み核燃料が約 600 t、低レベル放射性廃棄物がドラム缶で約 11,000 個である。この会社は専用の船を 3 隻所有している。この埠頭のクレーンの紹介の記事に「これらのクレーンは、一般荷役用として広く一般の皆さまにもご利用いただけます」という宣伝文句が書いてある。

http://www.nft.co.jp/record/pdf/rsf_j_h23.pdf

<http://www.nft.co.jp/equipment/equipment3.html>

注 2. 鎌田慧『六ヶ所村の記録』上・下、岩波書店、1991 年

注 3. ストレステスト報告書も提出済み

注 4. 北國新聞社、2001 年、p.106。この本は北國文化賞を受賞した。

注 5. 高島武雄・飯田嘉宏『蒸気爆発の科学』裳華房、1998 年、p.29& p.121

2012 年 5 月 3 日 筒井哲郎